

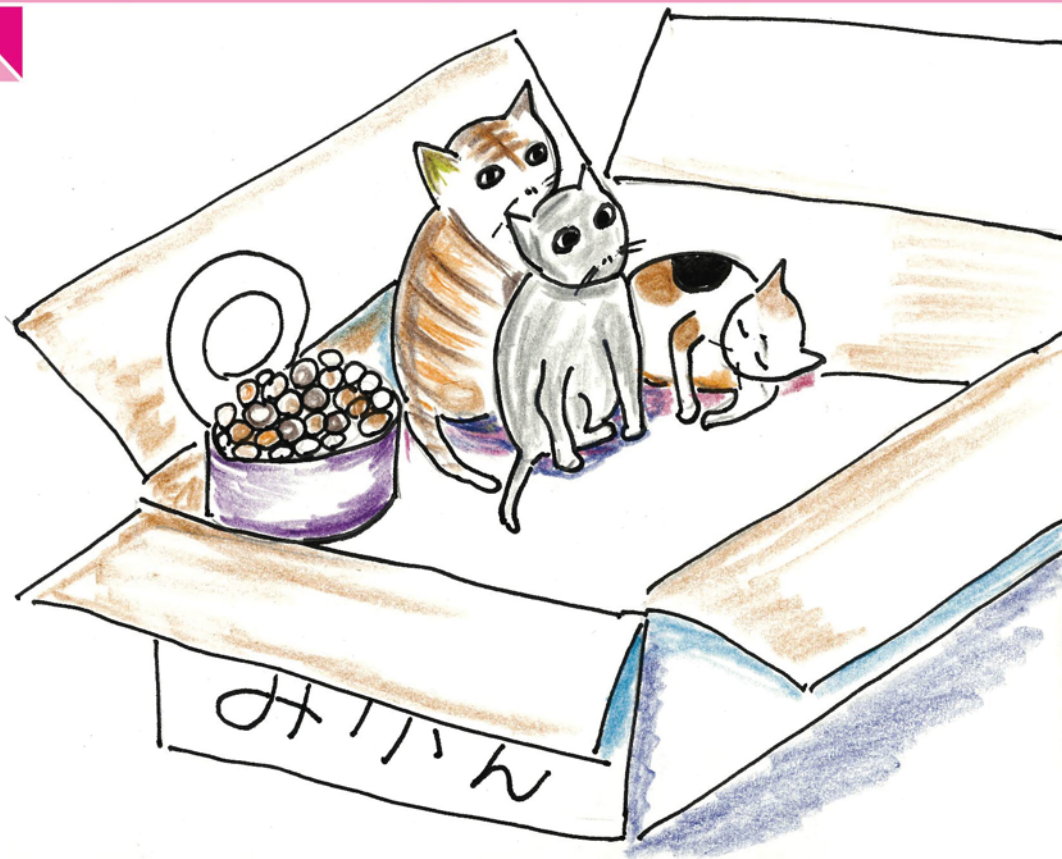
僕が本にしたかった物語 3



絵と文／ 猫田 ワン太郎 🐾

「三匹の子猫の物語」
「メイが教えてくれたこと」

三匹の子猫の物語



3匹の子猫が捨てられていました。
生まれて2ヶ月目でした。

段ボールの箱に缶詰めと一緒に入れられていました。
この缶詰めを食べつくしたら食べ物がなくなるね。

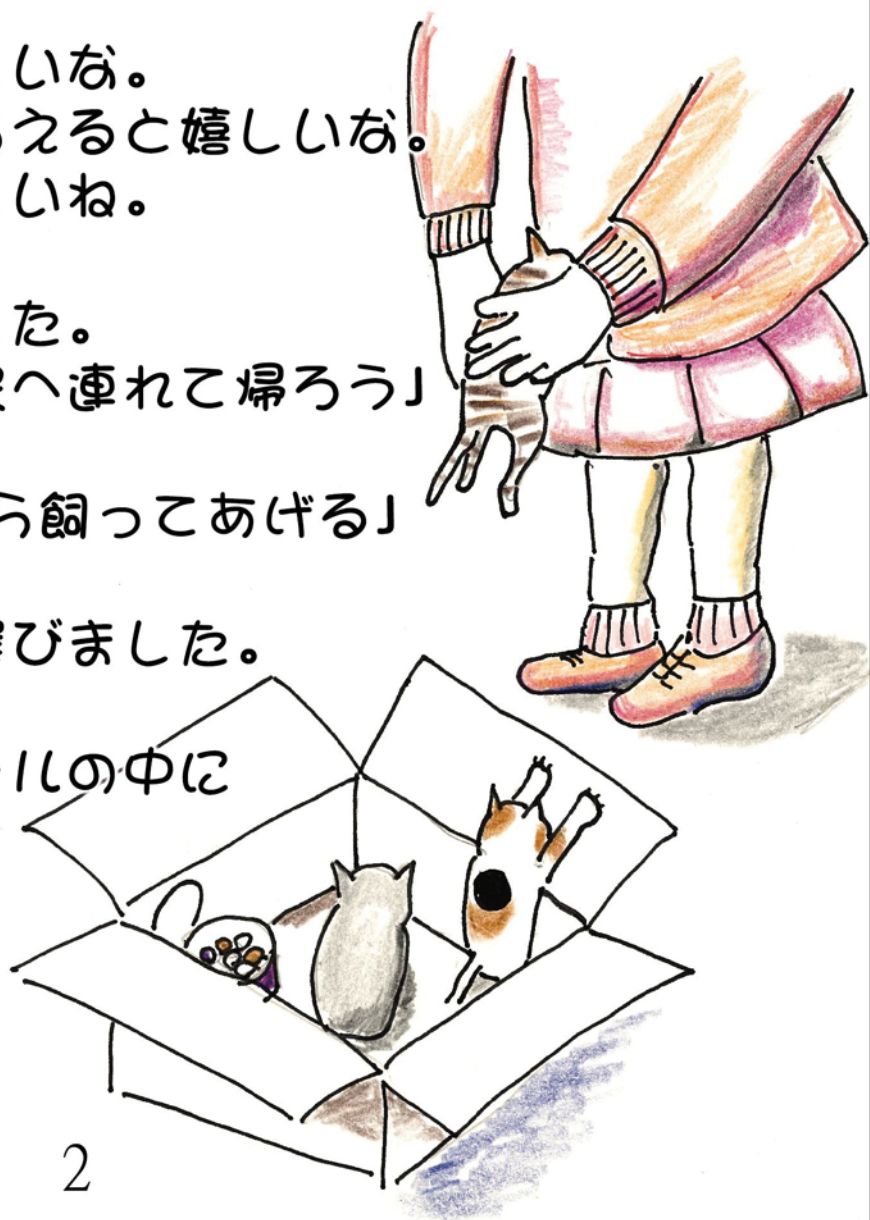
誰か拾ってくれると嬉しいな。
みんな一緒に飼ってもらえると嬉しいな。
いつまでも一緒にだと嬉しいね。

小学生の女の子が来ました。
「わー可愛い子猫達だ。家へ連れて帰ろう」
お母さんが言いました。
「一番可愛い一匹だけなら飼ってあげる」

女の子は可愛い一匹を選びました。

残りの二匹はまた段ボールの中に
入れられて元の場所に
置かれてしまいました。

僕達二匹はいつまでも
一緒にいようね。

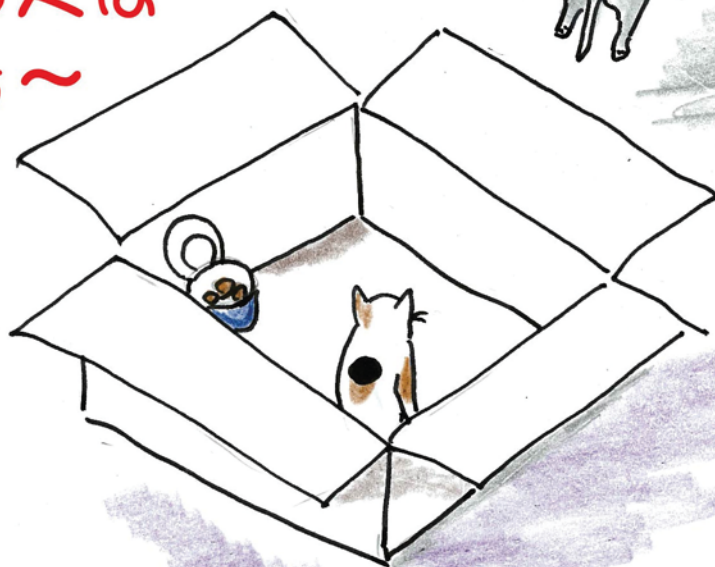


しばらくするとおじさんが来ました。

「この可愛い子猫の方を飼ってやろう」と
一匹を連れて帰って行きました。

段ボールの中には一匹だけ残いました。

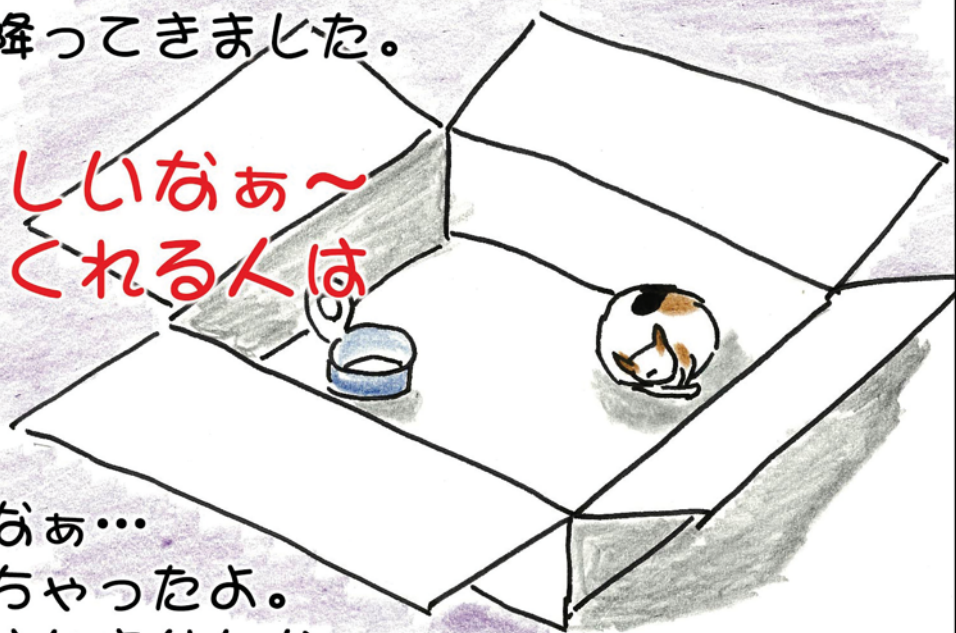
誰かいませんかあ～
飼ってくれる人は
いませんかあ～



僕は声の限り泣き続けました。

夜はしんしんと深まってきました。
いつの間にかやら雪が降って来ました。

寒いなあ～ 寂しいなあ～
誰か僕を飼ってくれる人は
いませんかあ～



おなかがあいてきたなあ…
もう缶詰はなくなっちゃったよ。
誰か飼ってくれる人はいませんか。

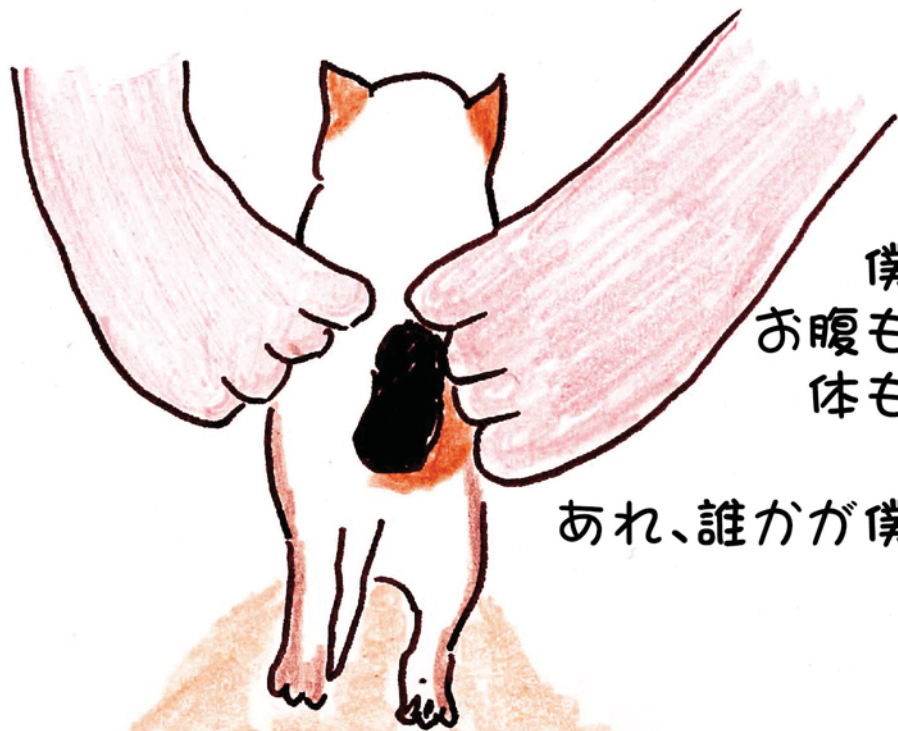
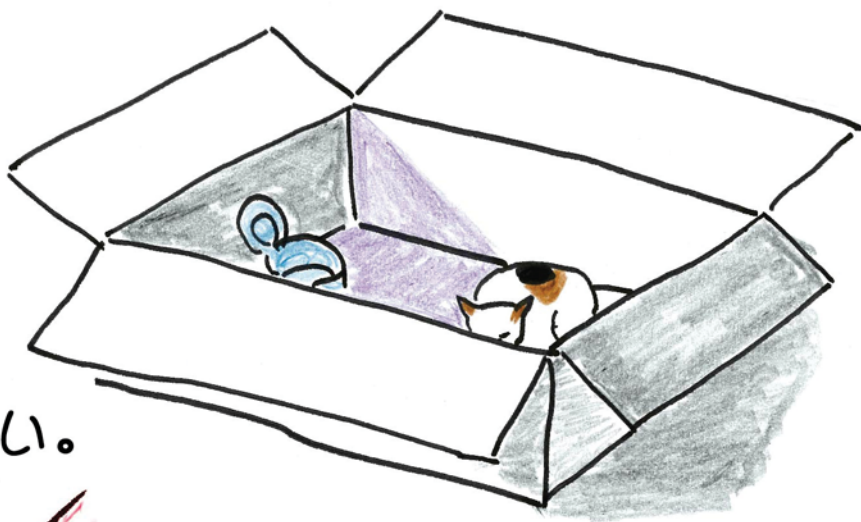
可愛くないかもしれないけど、僕を好きな人いませんか。
僕は僕のことには分からないよ。

雪がしんしんと段ボール箱に降り積もって来ました。

声がだんだんでなくなってきましたよ。
寂しいなあ～ 悲しいなあ～

神様、僕はそんなに
悪い事をしましたか。

僕はそんなに嫌われて
いるのですか。
誰か僕に気づいて下さい。



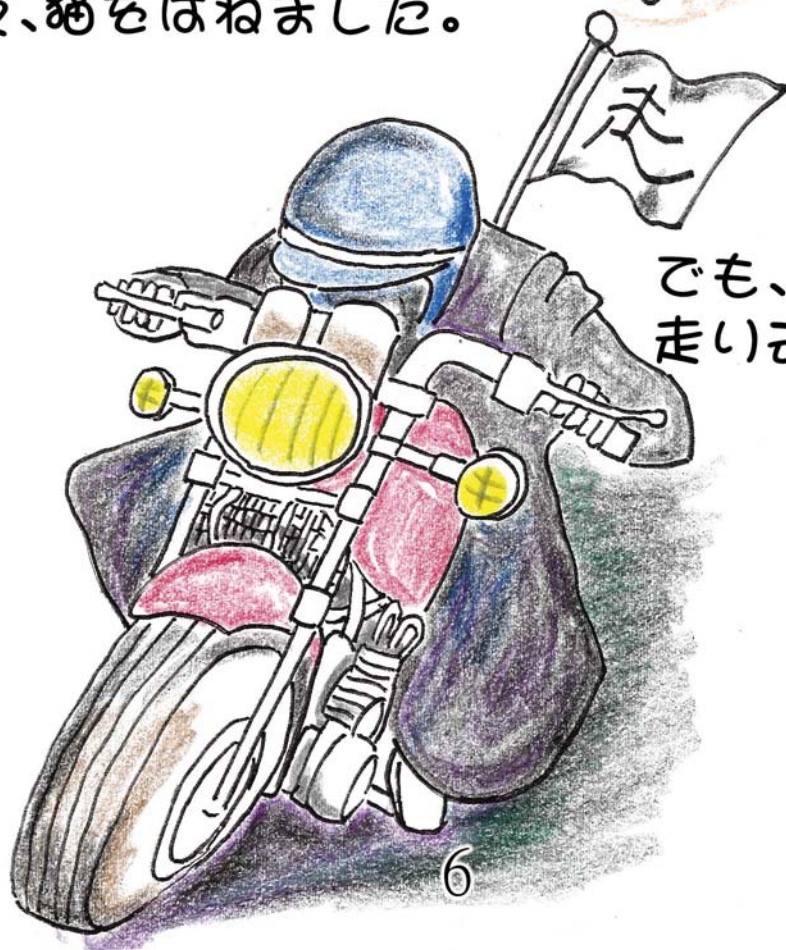
僕は眠くなってきました。
お腹もあかなくなってきたよ。
体も動かなくなってきたよ。

あれ、誰かが僕を抱き上げてくれたよ。
なんだろう？
不思議な気持ちだなあ…

もう何も考えなくていいんだね。
僕は幸せだったんだね…

メイが教えてくれたこと

僕は暴走族でした。
ある夜、猫をはねました。



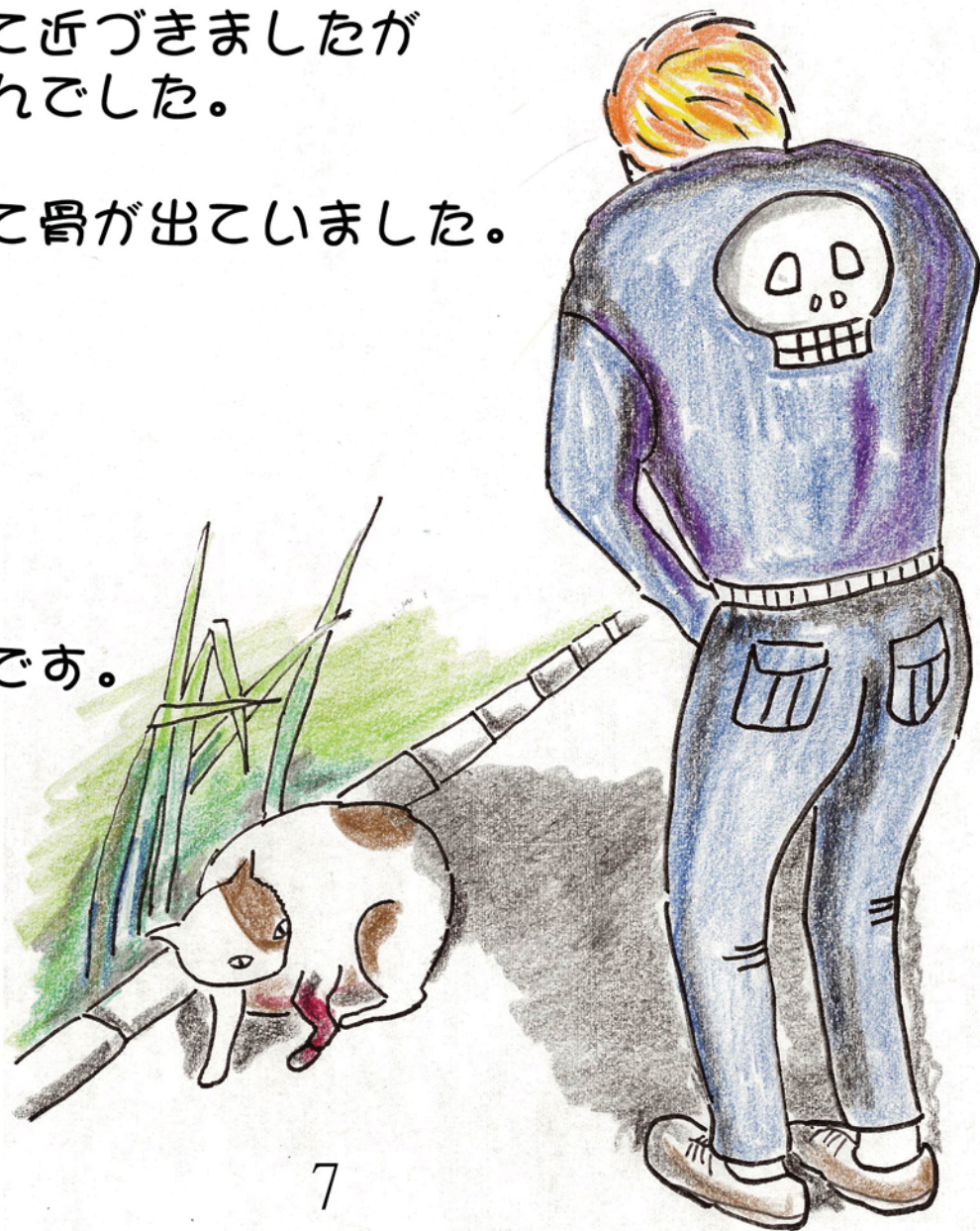
でも、気にとめずに
走り去りました。

次の夜、同じ所に猫がうずくまっていたいました。

バイクを降りて近づきましたが
猫は逃げませんでした。

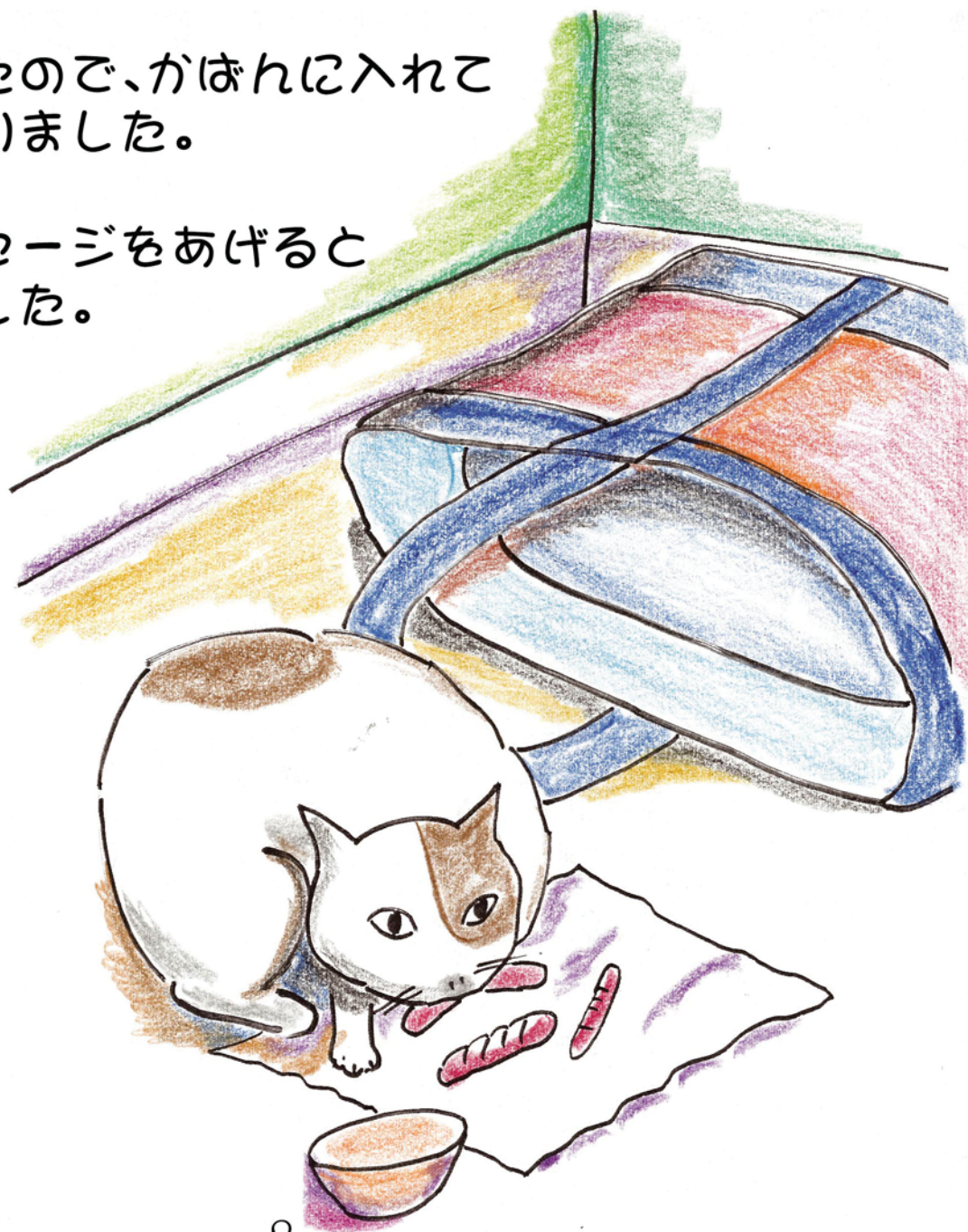
猫は手が折れて骨が出ていました。

僕がやったのです。



猫は弱っていたので、かばんに入れて
家に連れて帰りました。

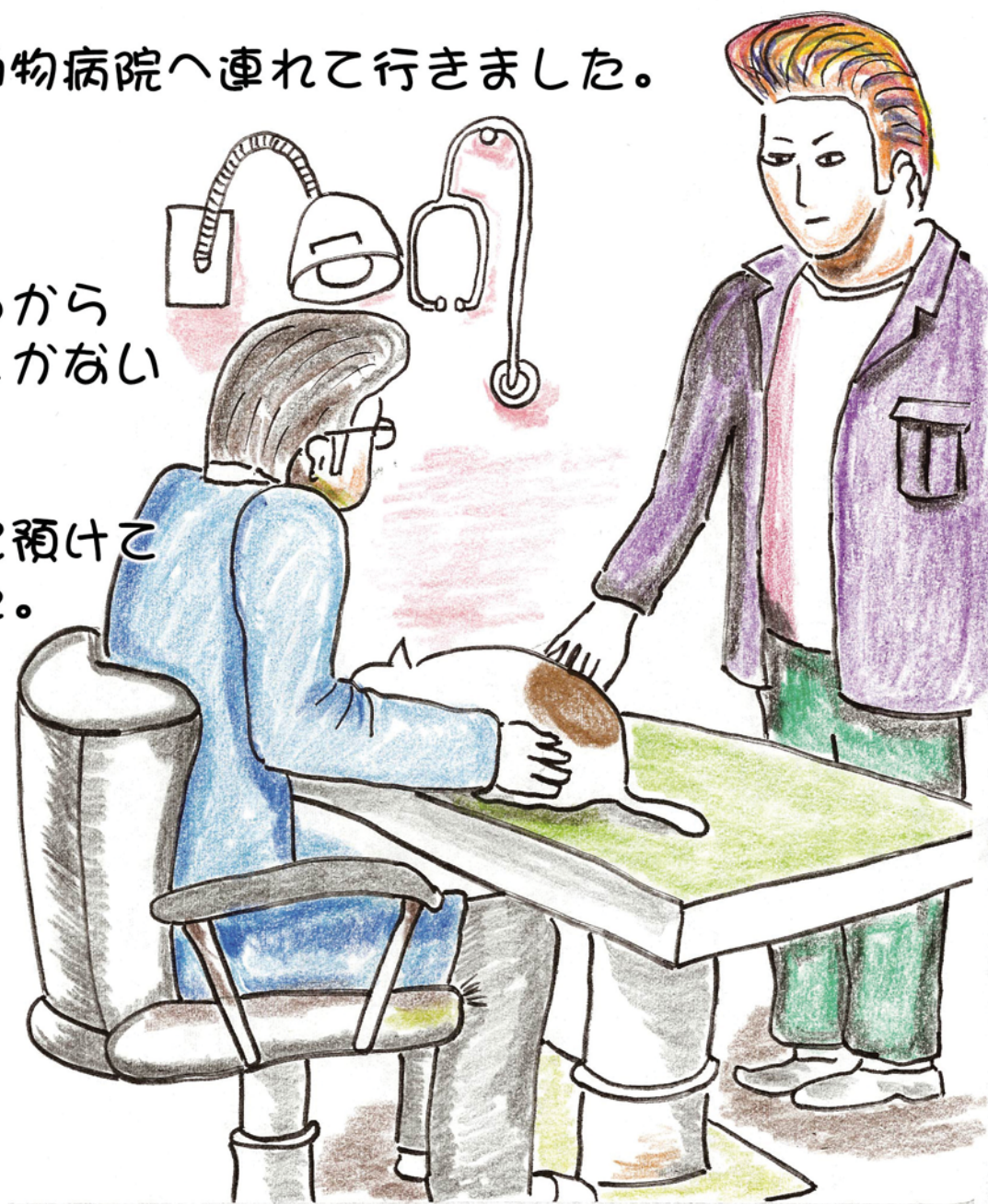
ミルクとソーセージをあげると
喜んで食べました。



僕は仕方なく動物病院へ連れて行きました。

獣医さんは
手が腐っているから
もう手を切るしかない
と言いました。

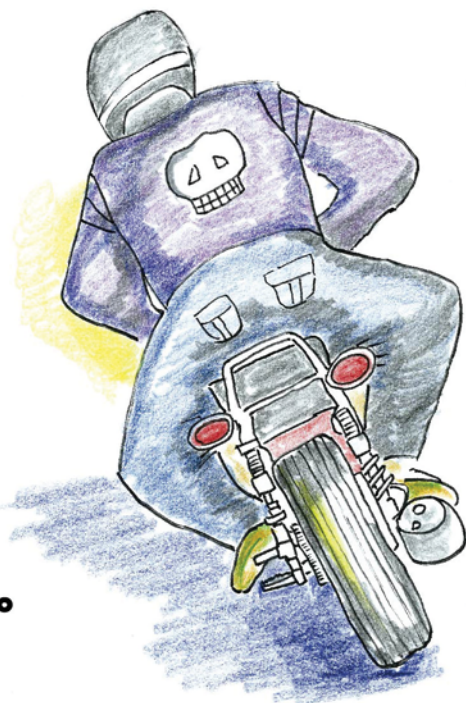
僕は動物病院に預けて
家に帰りました。



もう猫の事は忘れようと思いました。
病院に払うお金もあいませんでした。
僕はまたバイクを走らせていました。



でもなれだか楽しくあいませんでした。



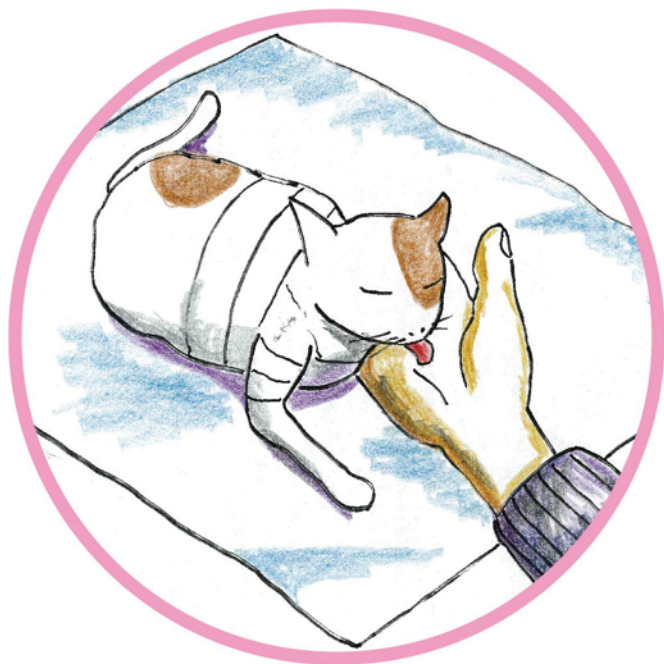
家に帰って猫がいた場所をかたづけ
ていると気がないだしました。

2週間ぐらい過ぎて仕方なく病院へ
電話をかけてみました。
猫はもう手術も終わって元気にして
いると言われ少しホッとしました。
心が晴れたと思いました。

でも...

僕は猫が気になったので、思いきって病院に行きました。
猫は僕の顔を見てニャーと鳴いてくれました。
僕がはねたのに、猫は僕の手に
頬おいをしてくれました。
僕はゴメンねと心の中で言いました。
猫はもう自由に走り回れないんだな。
自分で食べていけるのかな。
僕は悩みました。

よし僕が飼ってやろうと決心しました。
名前をメイとつけました。



先生にお金が無いから
少しずつ払うからいいですか
と聞きました。先生は信用
しているよと言われました。

**僕は自分の言葉を
信じてもらったのは
初めてでした。**

でも、メイを飼うことは
意外と大変でした。

僕はメイをきちんと飼うために
ちゃんとしたバイトにつきました。
きちんと働くことはとても
大変だったです。

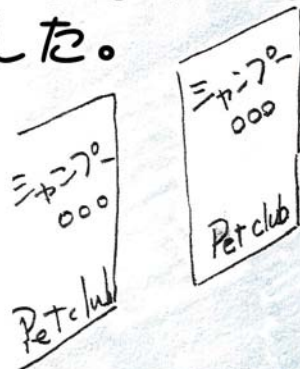
でも、メイとの生活の
ためならと思って
我慢しました。



僕がアパートに帰ると
メイはニャーと言って迎えに出てきます。
家にいる時間が長くないました。

ペットショップに
勤めている女の子に
飼い方を聞いているうちに
親しくなりました。

メイが彼女を作っ
てくれたんです。



彼女はメイを可愛いと
言ってくれました。
僕は嬉しくありませんでした。

僕は暴走族をやめました。
バイクも売りました。
なかなか大変でしたけど
メイに比べれば
大変ではありませんでした。



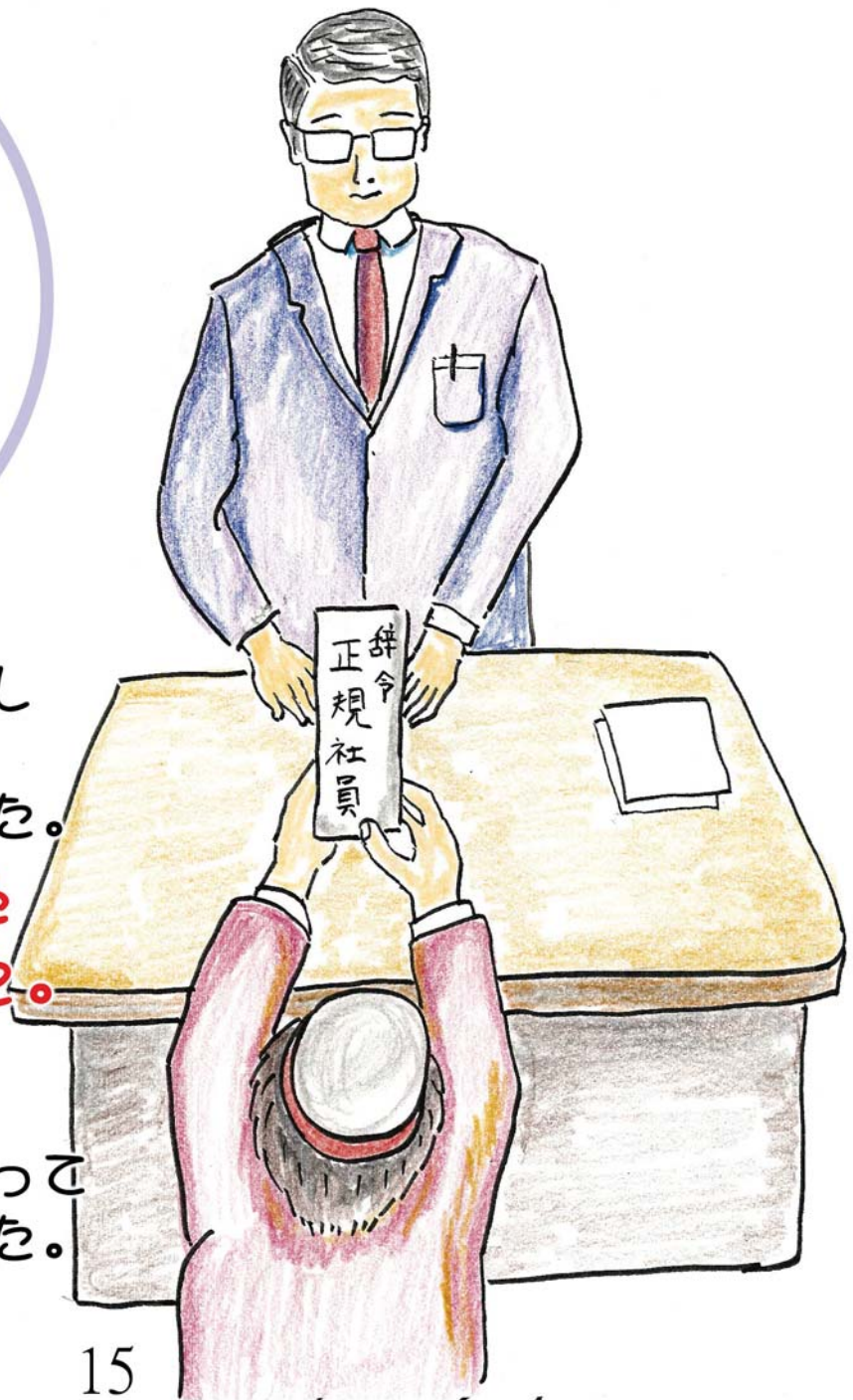
今は自転車です。
時々メイを乗せて公園まで
行くようになりました。



動物病院へもお金を返し
終わりました。
先生はほめてくれました。

**メイは僕に責任を
教えてくれました。**

バイト先の店長も
僕が真面目だからと言って
正社員にしてくれました。
嬉しかったです。

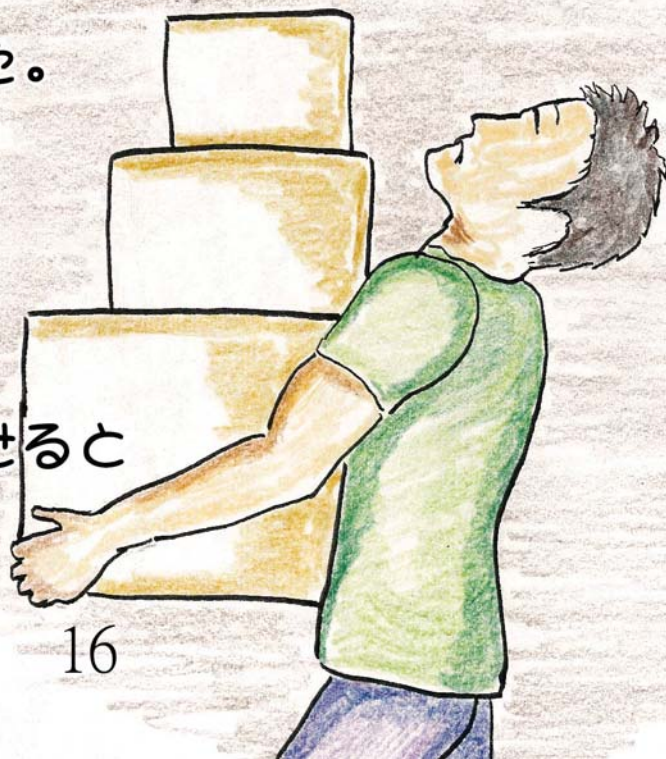
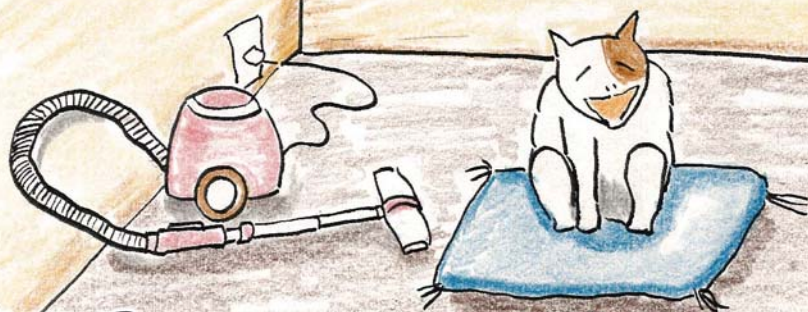


猫を飼ってはいけないアパートで
猫を飼っていたので
思いきって引っ越しを決めました。

猫を飼って良い
アパートです。

引っ越しは大変だったのに
メイは猫の手を
貸してくれませんでした。
座布団の上から
見ているだけでした。

でも、彼女が
手伝ってくれました。
これからみんなで暮らせると
ぐんぐんに楽しいかと
わくわくしています。



初めて親に住所を電話しました。
母さんは泣き声でした。
僕も泣きました。



これもメイのお陰です。



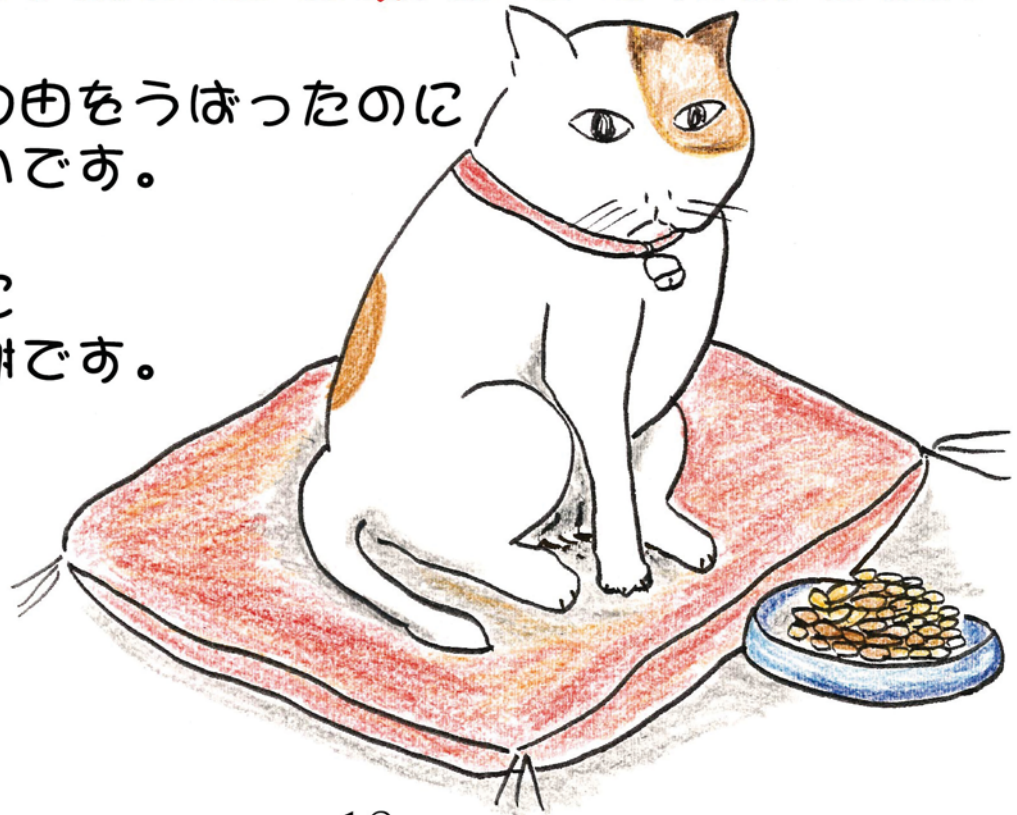


メイはご飯を食べる以外
何もしないけど

僕にいろいろなことを教えてくれました。

僕がメイの自由をうばったのに
怒っていないです。

そんなメイに
ただただ感謝です。



私はこの本を、お母さんが
子供達に本を読んであげる機会になることや
動物を飼ったことがない人が動物を飼う
楽しさを理解するきっかけになったり
親子や夫婦が家庭で自分たちの
動物を飼っていた思い出を話せるきっかけに
なればいいなあと思い作りました。



定価(税込) ごえん(ご縁)

感想文をいただけたら嬉しいです。

E-mail/info@midoriac.com

